

平成27年度第1回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

「次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、文中の「ロバート」(Ⅱ「ぼく」と「ジェイコブ」は同級生で、「ウィル・ヘンリー」は「ジェイコブ」の兄です。

ぼくとジェイコブはウィル・ヘンリーにつかまった。

学校の玄関でいつも水がわきだしている噴水から水を飲んでいた時のことだ。

「おまえたちは、そうすべきなんだ」ウィルがいった。

「どうして？」ジェイコブがきいた。「ロバートもぼくももう図工の授業はとらなくていいんだよ。

もうハイスクールなんだから。兄ちゃんと同じさ」

ウィルはいった。「だからいつてるんだ。オール先生にあやまったって、もしまだあの先生に教わるんだつたら、ただのごきげんとりさ。でもおまえたちはもう図工は教わらない。1だつたら先生にあやまることはおまえたちが悪がきでなく、りっぱな大人になったことの証明になるじゃないか」

ジェイコブはいった。「兄ちゃんはおほい大人のつもりらしいな。最上級生だつていうだけでさ」

「そんなことは関係ない」ウィルは弟のジェイコブにいった。「大人になるっていうことはがまんしなくちゃいけないってことなんだ。男らしくするってことだ。そこでこそそいたずらしてまわるなんてことは卒業するってことなんだ。むりにやれとはいわない。だれもそんなことはいわないだろう」ウィルは肩をすくめていった。「やるもやらないもおまえたちしだいなんだ」ウィルはぼくたちに背を向けて、教室にもどつていった。

「兄さんのいうとおりだよ」ぼくはジェイコブにいった。

「おまえ、兄ちゃんの味方をするのか？」

「ちがうよ、2兄さんがぼくたちの味方になつたんだ。ぼくも、去年オール先生にしたいはずのことが気になつていったんだ」

「ほんとうに？」

「うん。だからもしおまえがいやだつていうなら、ぼくひとりで勇気を出してオール先生のところに行くよ」

「おれもいくよ、ロバート」ジェイコブがにやりと笑った。「おれがおまえよりいくじがないなんて思われたくないからな」

「よし、いこう」

「これから？」

「今すぐいかなくちや、二度といけなくなるもん」

ぼくたちはオール先生のところに行った。先生はひとりで図工室にいた。ほうきを持って、かんなくずやおがくずをはいている。

ぼくは先生の名前を呼んだ。「オール先生」

先生はきこえなかったようだ。でもこちらをちらつとみると、びつくりしたような顔でほうきを落としてしまった。

「おまえたちか」先生はうなるような声でいった。

ジェイコブ・ヘンリーがAかどうかはあやしかつたので、ぼくは^{おおまた}大股で図工室に入っていくと、大声でいった。「ロバート・ペックです。去年ジェイコブ・ヘンリーとぼくは先生にひどいことをしました。それも一度だけではありません。今日はあやまりにきました。それから図工を教えてください。たことに^{おれ}おれもいたかつたんです」

あとは何をいつたらいいのかわからなかつたので、ぼくは先生のそばまで歩いていつて、先生に右手をさしだした。一瞬、無視されるかと思つたが、それはまちがひだつた。ぼくの手をにぎつた先生の手はワシの爪より力強かつた。ぼくはびつくりした。先生はにぎつたま放そうとしなない。先生の指は曲がつているらしい。関節炎のせいだろう。

「ロバート」先生はかすれた声でいった。B

ジェイコブが前に出ると、先生は左手でジェイコブの右手を取つた。そしてその場にじつと立つていた。年をとつて、白髪頭で、もしかしたら教えることに疲れているのかもしれない。

「ジェイコブ、ロバート」先生はゆつくりとうなずきながらいった。「おかげで一步だけ若返つたよ」ほんの一瞬、先生のしわだらけの顔が笑みを浮かべたようにみえた。

「ある意味でこれは3お祝い」といふべきかもしれんな。わしのお祝いじゃない。君たちのお祝いだ」ぼくたちの手をにぎつていた先生の力が弱くなつた。それでもまだ放してくれない。

「わしはもう年だ」先生はいった。「わしの気持ちなどどうでもいい。だが君たちの気持ちはとてもたいせつだ。だから、君たちいたずら坊主がすばらしいことをしてくれて、とてもうれしいんだ」

先生は手を放したが、今度はぼくたちのやせた肩に手を置いた。ジェイコブとぼくは何もいえずに、おがくずの中で立ちつくしていた。オール先生よりぼくたちのほうがびつくりしていた。

先生はまたうなずいた。「君たちのような若い者は、たぶんわしのことを目が悪くて背骨の曲がつた耳の遠い変人くらいにしか思つていないだろう。わかつてるさ。わしはいたずら好きの生徒たちはようしやしない。だが、こうしてきてくれてうれしいよ。それもあやまりにきてくれたんだからな」くもつた眼鏡のむこうで先生は何度もまばたきをくり返した。

「4かたゆで卵もまん中はやわらかいんだぞ」先生はいった。

「先生のことの前よりわかつてうれしいです」ぼくはいった。心からそう思つた。

「ぼくもです」ジェイコブ・ヘンリーもいった。「ぼくもううれしいです」

「よしよし」先生はどなるような声でいった。「さあ、帰れ。ハイスクールを灰にしちまわないように気をつけるんだぞ」

ぼくたちは声をあげて笑うと、図工室を出た。

そのあと国語の授業のとき、ぼくとジェイコブ・ヘンリーがオール先生と仲なおりした話をマルコム先生に伝えたいと思つた。一年前なら、ぜんぶ話してしまつただろう。5でも黙つていた。あやまりにいつただけで十分なのだ。ぼくが放課後に先生に話したのは、ミス・セアラが死んだことだけだつた。先生は猫が好きで、とても悲しいわ、といった。

(ロバート・ニュートン・ペック著 金原瑞人訳『続・豚の死なない日』より)

問1——線1「だつたら先生にあやまることはおまえたちが悪がきでなく、りっぱな大人になつたことの証明になるじゃないか」とありますが、なぜオール先生にあやまることが「りっぱな大人になつたことの証明になる」と言えるのですか。次の(①)・(②)にことばを入れることによつて答えなさい。

オール先生にあやまらなくても、(① 七十字)とジェイコブは思つている。それなのにオール先生に今あえてあやまるのは、いさぎよく、(② 十十五字)ということであり、それは、りっぱな大人にしかできない勇気ある行為であるから。

問2 — 線2 「兄さんがぼくたちの味方になったんだ」とありますが、このように言う理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 兄さんはロバートたちに大人になる方法を教え、それを実行するように勧めているから。
イ 兄さんはロバートたち二人がともにハイスクールの生徒として成長するように、公平に論じているから。
ウ 兄さんはロバートたちが自然と成長していくことを願い、無理やりオール先生のところへ行かそうとはしていないから。
エ 兄さんはロバートたちより先輩であるけれども、そのことで大人ぶったりしていないから。
オ 兄さんはロバートたちの気持ちを、オール先生の立場よりも優先してくれているから。

問3 ☐A・☐B に入ることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- A ア 口を切る イ 口を出す ウ 口をすべらす エ 口をはさむ オ 口をにぎす
B ア すまんな イ やっぱり ウ まったぞ エ ありがとう オ そうだろう

問4 — 線3 「お祝い」とは何に對するお祝いですか。文中のことばを使って、解答欄に合うように十二字以上十五字以内で答えなさい。

問5 — 線4 「かたゆで卵もまん中はやわらかいんだぞ」とありますが、これはどのようなことを意味するのですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア オール先生は悪さをする生徒には大変厳しく接するけれども、まじめな生徒には真剣に對応する立派な先生だということ。
イ オール先生は変人のようにみえるが、実は常識をわきまえていて、生徒の将来まで見通すことのできる先生だということ。
ウ オール先生は一見とつきにくい人のようだが、実は生徒思いの優しい先生だということ。
エ オール先生は年寄りなので疲れているようにみえるが、実は教育への情熱を心に秘めた先生だということ。
オ オール先生はまじめな生徒が好きではあるが、一方で冗談の好きな面白い先生だということ。

問6 — 線5 「でも黙っていた」とありますが、なぜ「ぼく」は黙っていたと考えられますか。解答欄に合うように三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

二 辻村深月の小説『凍りのくじら』は、主人公理帆子の高校二年生のときの出来事を中心に描かれます。理帆子は周囲の友達と表面的にはうまく付き合っていますが、心の中では突き放して観察してい

ます。そんな彼女は父親の影響で藤子・F・不二雄の作品に親しみ、特に『ドラえもん』を愛しています。小説中で理帆子は重大な事件に巻き込まれ、それを乗り越えて成長していきますが、彼女の歩みの傍らにはいつも『ドラえもん』や藤子・F・不二雄がありました。次の文章は、この『凍りのくじら』について書かれた「解説」です。これを読んで、後の問に答えなさい。

私たち人間は、ごはんと物語を食べて成長する。

ごはんは物質としての栄養源だが、物語は情報として私たちの滋養になる。情報？ かたちのないものでお腹がいっぱいになるの？ と思われるかもしれないが、文字を読み、ことばをしゃべる私たちヒトなら、ちゃんと情報は脳や身体の中で「栄養分」になる。物質に情報が備わっているのと同様に、情報も脳の神経細胞を発火させたり、身体のだるさやさまざまなセンサを刺激したりして、物質を動かし、私たちの気持ちを動かす。だから文字だけでつくられたお話が、文字通り私たちの血となり肉となるというのは正しい。

ただし、ひとつ大切なことがある。☐Xは物語にならない、ということだ。

物語には必ず書き手（語り手）と読み手（聞き手）が存在し、どちらかが欠けてもそれはお話にはならない。誰かが書き、語った物語を誰かが受け止めて、そこではじめて物語は人を育てる。

私たちヒトの脳と身体は、おもしろい物語を「美味しい」「楽しい」「愛しい」と思うように、進化の過程で洗練されてきた。そうしてヒトは、自分たちのaカクトクした言葉をさらに磨き上げてきた。言葉をやつるヒトという動物は、誰かに何かを少しでもおもしろく伝えられるよう、文法や語法をかたちづつてきたのだ。たとえば「おもしろいよ、これは」という話し方は、単に「これはおもしろいよ」というよりインパクトがある。前者の方がよりおもしろく伝わるし、語る方も聞く方もわくわくどきどきする。

だからそういった私たちの本能は、小説の中にいちばん熱く、繊細に息づいている。謎への興味を掻き立てるために物事の時系列をわざと変更して伝えたり、どんでん返しがbアザやかに決まるように相手の目を別のところへ惹きつけたり、すべては物語をおもしろく伝えるためにヒトが編み出した手法なのだ。

このことは『凍りのくじら』と関係があるのだろうか？ もちろん大いに関係がある。

美味しいごはんはついおかわりしたくなるように、いったん物語のおもしろさを知ってしまったら、もっと味わいたくてたまらなくなる。元気に食べて元気に遊ぶ、これがすぐくと育つ秘訣だと私たちは知っている。実は物語もまったく同じだ。ごはんを食べたらポカポカと温まって動き出したくなるように、一部の人は読むだけではなく物語を書きはじめる。そうでなくても、1すべての人は物語と共に生きるようになる。年齢を重ねるうちに環境は変わり、学校を卒業して社会に出て、悩みや希望も少しずつ変化してゆくが、それでも毎日ごはんを食べるように、私たちは物語と共に生きてゆく。

辻村さんの小説を読んでいると、物語の豊かさを全身で取り入れ、まっすぐに歩んでゆく人間の力強さに改めて気づくのだ。これまで読んできたたくさんの物語が、自分の身体の中で歌っていることに気づく。放課後の校舎。ネットに書き込まれた誰かの悪意。ほんとうの友だち。禁断の魔法。辻村さんの小説では、私たちが子どものころ本当に美味しく取り込み、あるいはときに苦さや辛さも我慢しながら食べて、懸命に身体を動かし、ぐっすりと寝て夢で見たいくつもの物語が、豊かなエネルギーとして息づいている。私たちが物語で育ってきたこと、なによりそのことが読みながら嬉しくなってくる。（中略）

私たちは身近な例を知っている。映画の『ドラえもん』では夏休みの冒険を経て、のび太とドラえもんはパパとママの家に戻ってくる。映画監督の山崎貴さんが以前にこんなことをいつていた。新学期になればまたのび太は0点を取るかもしれないが、それでも長年にわたって『ドラえもん』を観ていると、少しずつのび太が成長していることがわかるんだ、と。確かにその通り。毎年映画館でエンディングの空が映し出されるたびに、のび太と私たちは人生の小さな節目を体験し、ほんのちよつぷり育っている。『凍りのくじら』を読むと、だから節目ごとに感じた想いが、私たちの胸に熱く込み上げてくる。物語を食べて育ったこれまでの人生と、これから食べてもっともっとたくさんのものを感じる未来の物語が、私たちの中でいっしょに歌い出す。(中略)

ヒトは物語を楽しむように進化してきた、とはじめに述べた。あとほんの少しだけ、私たちの心のヒミツとこの物語の関係を書いておく。

理帆子は決して万人の共感を誘う主人公ではないと書いた。2それでも私たちは理帆子の物語についてゆく。それは私たち人間に、他者の心を感じ取るいくつかの能力が備わっているからだ。元気に食べて元気に遊ぶのがすすくと育つ秘訣だとはわかっていても、そんなにいつもうまく私たちは「スコ」やかに伸びるわけではない。苦しくて食べ物が喉を通らない時期もある。その現実を知っているから私たちは理帆子と共に歩み、彼女の幸せを願う。

厳密な科学用語ではないが、ここでは「共感」(シンパシー)と「感情移入」(エンパシー)という言葉で説明しよう。シンパシーとは相手とひとつの感情になる状態のことだ。物語の中で主人公が泣けば自分も泣き、主人公が怒れば自分も怒る。しかしエンパシーはもう少し高度な情動だ。ある程度成長して、周囲のことがよく見えるようになってはじめて身についてくる能力である。自分とは立場や考え方の違う相手であっても、その人の気持ちを付度して「飲む」、悲しみ、胸を痛める、そういう成熟した能動的な力がエンパシーだ。

『凍りのくじら』を読むとき、私たちは共感と感情移入の両方で理帆子の心を感じ取る。私がこの物語を好きなのは、そういったお話を楽しめるように成長してきた私たちの心を、何よりも大切にしていると思えるからだ。

もうひとつ好きなところがある。藤子・F・不二雄先生はSF(サイエンス・フィクション)をSukoshi Fushingと読み替えた。理帆子はスコシ・ナントカと周囲の人にさまざまなSFを当ててゆく。実は藤子先生が自分のマンガをSFと呼ばず「少し・不思議」といったのには経緯がある。その理由はここで詳しく述しないけれど、SFのSにスコシという言葉当てた藤子F先生はある意味大胆で、図太かったと思う。なぜなら、藤子F先生の描く物語は、本当はいつだって少しどころかすごく不思議だったからだ。どこでもドアを開けばたちまち宇宙の果てまで行ってしまう、それが「すごく・不思議」でなくて何なのか。それでも藤子先生はあえてその不思議を「少し」と表現してみせた。

私たちはどんなに不思議な物語でも、家の中でコタツに入りながら、寝つ転がって読むことができる。「すごく・不思議」なことを私たちは日常の「少し・不思議」として楽しめる。これって人間が進化の過程で身につけてきたすばらしい能力ではないか。不思議なことはもっともつとある。遠い海にいる鯨を思い浮かべ、未来がいまとながっているかもしれないと考える、どうしてそんなことが可能なのか、考えてみればすごく不思議なことだ。3そんな不思議な現実を受け入れながら、私たちは毎日暮らしている。少し、不思議だ。

(瀬名秀明「解説」(辻村深月『凍りのくじら』所収)による)

問1 — 線aとcのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ☐ X に最もふさわしいことを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 機械的な情報 イ 孤独な情報 ウ 間違った情報
エ 刺激的なお話 オ 文字で書かれないお話 カ 結びのないお話

問3 — 線1「すべての人は物語と共に生きようになる」の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 時系列の変更やどんでん返しといった物語の手法が、実際の人生にもあることに気づき、実人生が面白くなるということ。
イ 私たちが実際の人生で経験してきたことが、物語を読むときにも影響して、主人公を理解することができるということ。
ウ 物語の中で主人公が様々な試練を経て成長することが、物語を読む私たちの成長にもつながっていくということ。
エ 私たちが物語を読んだときに感じた思いが、別の物語や実際の人生でも生き生きとした感情を呼び起こすということ。

問4 — 線2「それでも私たちは理帆子の物語についてゆく」とありますが、その理由を説明した次の文の ☐ に最もふさわしい部分を四十字以上五十文字以内で抜き出し、その最初の五文字を書きなさい。

人間は、 ことができるから。

問5 — 線3「そんな不思議な現実を受け入れながら、私たちは毎日暮らしている」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 『ドラえもん』に出てくる「どこでもドア」をすんなりと受け入れられる人は、藤子・F・不二雄と同様に大胆になっていくということ。
イ 内容自体が非現実的なものであっても、物語が書かれた本は身近にあって、寝転がって読むことができるということ。
ウ 日常生活では決してあり得ないことも、私たちが物語に親しむ中で面白く感じられるようになるということ。
エ 年齢を重ねると様々な物語を知って、突拍子もない内容でも受け入れることができるようになるということ。

問6 〓線「私たち人間は、ごはん物語を食べて成長する」の内容にあてはまるものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 物語は私たちが愉快な気持ちにさせてくれるので、現実で嫌なことがあっても、それを忘れさせてくれる。

イ 物語を読んで感動した体験が蓄えられ、これから先の人生を切りひらき、豊かなものとしていく力となる。

ウ 大人になって自分以外の周囲にも目を配るようになると、純真な心が失われ、物語を子どものときほど楽しめなくなる。

エ 物語を読むと、その情報が私たちの身体にも精神にも作用し、心身の発達を促す。

オ 大人になると、「すぐく・不思議」な「どこでもドア」を「少し・不思議」なものとして受け止められる。

問7 人間がことばを手に入れて以降、物語に対して行ってきた努力とは、何を目的とした、どのようなものですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

「以下余白」

解答用紙

小計

小計	
----	--

①	
7	
0	

7

10

[illegible]

14

1

問 3
A
B

問
3

A

B

12

15

הַיְיָ אֱלֹהֵינוּ

対するお祝い。

[illegible]

問
5



問
6

[illegible]

35

45

と思うようになったから。

問
1

a	
b	やか
c	やか

やか

C

やか

問
2

問
3

問
4

問
5



問
6

1000

問
7

30		
40		

30

40

小計	
----	--

合 計	
--------	--

小計

合計

受 験 番 号	氏 名

受食音北厚月故三黃書卷二